

足跡としての研究報告

路地に野の花も可憐に咲き、春爛漫となってきました。季節と同様に、経済環境も春そのものとなっています。建設業界ではかつてないほどに技術が注目されるようになってきました。こうした中、日々の研究開発が成果となって現れていることや、新分野へのチャレンジが目に見えるようになってきたことに感謝する次第です。

春といえば、私の故郷は今年 3m の大雪でした。雪国にあっては春がもっとも嬉しい時です。春先には凍みわたったまっさらな残雪の丘をのぼり、ウサギの足あとを追ったり、杉の枝を橇のようにして滑ったり、膨らんだネコヤナギをとったり、……。いつの間にか遠くまで行ってしまい、雪は溶けはじめ、帰りに苦勞するという気ままなものでした。しかし、足あとが残されているから大丈夫です。

企業における研究開発では往々にして目的とするものを直接的には実施できない場合や、たとえ実施してもめざす高性能の技術ではなく、性能を抑えたものを開発せざるをえない場合が往々にしてあります。また、期待通りにはきれいな成果をだせない場合もあります。このような場合でも、それをまとめ直す作業をとおした研究報告は自らの足跡となります。自ら志す研究開発にたいして、少し踏み外しても、たとえ右に左によれていても、後に振り返ってみると、めざしていた方向には大きくは外れていないことが多い。オリジナリティが高ければ高いほど、一般には真っ直ぐには進めないし、それだけ足跡を残すことが重要になります。ましてや、実務への展開や技術商品としての具体化においては、様々な要素を総合してこそ使われる技術になります。その中で研究報告は研究的に見つめなおす作業でもあります。

現実には多くの要素がある中から、一つの側面で整理しなおして分かりやすくまとめるには、研究開発の観点が明確でなければならないし、課題を明確にしなければならない。かなりのパワーも要する。まさに本質を究明する作業です。課題設定、事実の記述、そして、現実の様々な情報をそぎおとして主題にたいして法則性を見だし、そして提案にまとめる。これが研究員のメッセージであり、自らの足跡になり、さらに追隨する研究者のルートファインディングの手助けとなる。研究報告の作成を、日常の業務のなかで今一度めざす研究開発を見つめなおす機会として活用していただきたい。

昨今、ある構造設計者による構造耐力偽装や、世界的に著名な研究者による論文捏造など、研究者・技術者自らを否定する事件が起きています。この事実の上では「そこに弱い自分が存在していた」という詩的表現も空虚な言葉でしかありません。我々研究員に課された基本は、事実を事実として記述し、その分析から発想してこそ顧客価値向上に貢献する技術を提案できるものと思います。

当研究報告は、オリジナリティの高い、息の長い、顧客価値を創造する技術開発にむかうケルンになるよう期待しています。

2006 年 4 月

清水建設株式会社
執行役員 技術研究所長
博士（工学） 矢 代 嘉 郎